名古屋造形大学
やさしい美術プロジェクト情報誌

ヤサビのイト

1・2月号
2009 vol.8

やさしい美術プロジェクトは病院と協働で「やすらぎのある快適な医療空間」を模索し創出する、学生主体の活動です。

▲パネルディスカッションの様子。会場誘導などの運営は、メンバーら学生たちの手によって行われた。

シンポジウム開催

昨年十一月二十九日に同朋学園名古屋キャンパス成徳館において、現代GPシンポジウム「やさしい美術―いのちの現場で育まれるアート・デザイン―」を開催しました。

開催目的は医療とアート・デザインの関わりを多角的な視点でとらえ、その協働の社会的意義を展望し、今後の可能性と発展性を見出すことです。基調講演では、アートマネージメントの専門家である林容子氏に医療福祉の現場における美術の必要性を精神性や行政的視点で発表して頂きました。「アートは社会の毛細血管である」という林氏の言葉が、多くの来場者に感銘を与えていました。パネルディスカッションでは医療人類学者の小林昌廣氏、生命倫理学者の田代俊孝氏、足助病院院長の早川富博氏をお招きし、宗教・建築・身体表現など様々な分野を横断的に議論しました。美術を通して個人の表現したい感情や記憶を掘り起こすことが心のケアとなり、科学に偏りがちな医療にあたたかさを与えるのではないかと思いました。

この日は約百名の方が来場。この経験は、今後のプロジェクトを支える大きな力となるでしょう。

（文・伊東 里奈）

P2・3

やさびの作品マップ　足助病院 二〇〇九

特集　足助病院に現在展示されている、やさしい美術プロジェクトの作品紹介

やさびの作品マップ

足助病院 二〇〇九

足助病院には、やさしい美術プロジェクトの活動によって様々な場所に作品が展示されてきました。現在、病室や院内の十ヶ所にそれぞれ個性的な作品が展示されています。今回は現在展示中の作品を地図形式で紹介します！

（編集・竹中 仁美）

＊お願い
このコーナーはあくまでも作品紹介の記事です。病院利用者様以外の方の鑑賞はご遠慮願います。

1 Drawing

作者　鈴木 里菜
搬入年度　2004

『やさしい気持ちにさせてくれる作品』をテーマにした五つの絵画作品。「クッキー」「そよ風」「ホットケーキ」「ドロップ」「緑の小鳥」。

2 しわ／いいなあ／やさしくやさしく

作者　井木 宏美　搬入年度　2004　全3冊

ひとりの女の子を主人公に綴られた絵本作品。作者から子どもたちへのメッセージが、こころあたたまるお話しに込められている。

3 私の美術館

作者　デザインチーム
浅井 香名子／福井 奈々恵
搬入年度　2007　全 60 個

患者さんがベッド周りの物を収納できる絵はがきフレーム付きマルチボックス。フレームには季節ごとの絵はがきがプロジェクトから届けられる。

4 えんがわ画廊

企画者　泉 麻衣子
搬入年度　2008
全 17ヶ所

各病室のネームプレート下に小さな展示台を設置し、その上に小さな美術作品を月代わりで展示している。

5 光を感じる風景

作者　門川 諒子
搬入年度　2007

壁面に窓が現れたかのように、画面にみどりあふれる公園の風景が描かれた絵画作品。

6 bookshelf（本棚）

作者
コーディネートチーム
伊東 里奈／井木 宏美
／浅井 香名子
搬入年度　2003

待合の空間整備の一つとして制作された、子どもたちの絵本を整頓して置くための本棚。最上段には、右記（2）の絵本作品が置かれている。

7 ひとみごろ（人見頃）

作者　嶺 うらら
搬入年度　2005

ボードゲームをテーマにした、陶器と木のぬくもりあふれる立体作品。自由に触れ、自然の素材感を感じることもできる。

8 Sign Language【手話】～hello～

作者　林 治徳
搬入年度　2006

病院職員さんの手をモデルに、ローマ字の手話「H」「E」「L」「L」「O」（こんにちは）が形作られている立体作品。

9 reliance

作者　林 治徳
搬入年度　2003

足助病院の地域や人々の結びつきを、寄り添う二つの横顔で表現した立体作品。

10 コトバノツブ／コトバノみくじ

作者　天野 入華
搬入年度　2006/2007

帽子型の箱の中にある言葉やおみくじが書かれた紙を、患者さんが自由に手に取り持ち帰ることができる作品。

11 薫る hikari

作者　竹中 仁美
搬入年度　2007

光と風のイメージを竹の形と和紙でかたどり、薄暗い階段の吹き抜け部分に吊るした照明作品。

今月のBMOXルチ

～私の美術館～

絵はがき通信

足助病院の患者さん同士や患者さんと職員さんがコミュニケーションをとるきっかけとして絵はがきを飾っている、絵はがきフレーム付きマルチボックス「私の美術館」。

やさしい美術プロジェクトでは制作体験や募集を行って絵はがきを集め、年四回に分けて患者さんの元へ届けています。

制作体験に参加してくださる方、絵はがきを送ってくださる方、いつもありがとうございます。

今回はみなさんの描いてくださった絵はがきの一部をご紹介させていただきます。

（文・浅野 瑠璃子）

春

暖かい春を感じさせてくれる絵はがきたち。

夏

紙を切り貼りして、空を描いてくれてます！（左）

秋

木の葉の音が聞こえてきそうですね。

冬

心に「ほっ」と温かさを届けてくれる絵はがきたち。

アマノのひとこと ～コトバノツブ～

「コトバノツブ」は、足助病院薬局前に設置された天野入華おすすめの文章を病院利用者様が自由に持ち帰れる作品です。

希望の数だけ失望は増える

それでも明日に胸はふるえる

「どんなことが起るんだろう？」

想像してみるんだよ

Mr.children

「くるみ」

<アマノからの一言>

年末年始は自然とその年を振り返って物思いにふけります。
また、「今年はどんなことがあるのかな？」と少しわくわくします。
そんな時に頭を流れる歌を今回選びました。

いっしょにつくろう!! ちよだより

発達センターちよだでは、自閉症や発達障がいなどの障がいをもつ児童のためのデイサービスを併設しています。私たちは発達センターちよだと協働で各月に１回、子どもたちが楽しめるような作品制作体験を実施しています。

（編集・浅野 瑠璃子）

11月 紙粘土で遊ぼう

材料
紙粘土・水・水彩絵の具

道具
粘土へら・しぼり袋・麻布
画用紙・エアパッキン

今回の制作体験は「感触を楽しむ」がテーマです。

発達障がいなどをもつ子の中には、視覚は敏感だが、手足の感覚が鈍い子など、感覚が敏感な部分と鈍感な部分との差が大きい子もいます。しかしその子たちに、新しい感触を提供することで、その差を縮める手助けになるのです。

今回は紙粘土に水をふくませてクリーム状にし、絵の具を混ぜこんで色をつけたものを使用。キャンバスも紙だけでなくエアパッキン（プチプチ）や麻布も使い、粘土のくっつき方の違いもそれぞれ楽しんでもらいました。

子どもたちは紙粘土の感触が気に入ったようで、大胆に画面に向かってくれました。

▶キャンバスの違いを楽しんでくれました。

発達センターちよだスタッフ＆メンバーのコメント

制作体験が始まったら、子どもたちは集中して画面に向かってくれましたね。紙粘土を手にべったりつけて、画面に向かう子。しぼり袋で丁寧に作業を進める子。それぞれ自分の行動で変化が起きてるということを、感じてくれたようですね。

制作が始まる前に、準備の様子や試作見本を子どもたちがじっくり見ていたことに驚きました。期待感の表れでしょうね。

ぶらり みちゆく 足助旅

第八回 シリーズ「職人の道」② 木地作り・鍛冶仕事

木地作り

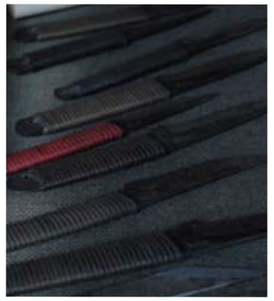
「木地」とは、漆器の地として使われる木材のこと。ろくろで木材を回転させ、刃物を当てて形を削り出していくことを木地作りと言います。

木地作りは普通、木を削る道具である刃物を自分で作ることから始まります。「既存の道具では既存のものしか作れない。」とおっしゃる原 章展さん。作るものそれぞれに応じた形の刃物を、その都度制作します。

作りたい形と使い勝手の良い形、両方のバランスをとりながら制作するのは至難の業。「これからも腕を磨き、ゆくゆくは地域の材料で漆塗りまでの工程を全て自分でやってみたい」と話す原さん。漆塗りを職業とする方も少なくなる一方、最近は全行程を自身で行う木地屋さんも多いのだとか。

削りだす作業によって、元の材料の八割がおがくずになってしまうという木地作り。そうして丁寧に作られたものには、洗練された美しさが宿っていました。

▲真剣な面持ちで木地を削り出していく原 章展さん。



▼伝統の業が光る刃物がずらり。握りやすい形に工夫され、切れ味も抜群。

鍛冶仕事

三州足助屋敷で鍛冶屋さんを務めるのは、六代目足助重光こと、広瀬明史さん。

代々続く広瀬重光刃物店は、先代、先々代の時代には戦争に使われる軍刀も作っていたそうです。終戦時に日米講和条約が締結された際には、記念にアメリカに贈るための刀も依頼を受けて作られたのだとか。今でも、当時作られた刀が一本自宅に残っているそうです。

「刃物を長く使ってもらえるように」と修理も行っている広瀬重光刃物店。先々代の作った古い刃物が修理にくると、深い歴史を感じると言います。

後を継ぐ息子さんに、広瀬さんは「なんでも使い捨ての現代で、手打ちのものの良さを伝えるような工夫をしてもらいたい」と期待を寄せています。

一つの業を一つの家系で受け継いでいく難しさ。世代を超えて研ぎ澄まされた熱い思いが、刃に込められています。

（文・張 祐寿）

発見！町中アート

子どもに戻る時間

街でよく使われてる地下道。塗装のはげた壁に落書きがされていたり、電灯にクモの巣がかかっていたりする。大人になって色々なことに忙しくなると、ただの無機質な「通路」として歩いているかもしれない。

しかし、子どもの頃に地下道やトンネルを「くぐる」時、「もしかしたら他のどこかにつながってるんじゃないか」という期待感や、まるで冒険者になったような気持ちになったことはないだろうか。

時々ふとその頃の気持ちに戻って、何か小さな発見を探してみてはいかが。

（文・芳賀 紗織）

▲地下道には子どもの頃のワクワク感がひそんでいる。

＊ お詫び　ヤサビのイト 11･12 月号にて、竹内 さとみさんの『青春 よじ登りフェンス』の文章に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。

病院職員のオススメ！

第８回 映画

推薦者：山内 啓嗣 さん（医事課職員）
遠山 勝也 さん（社会福祉士）

旬の映画

yasabinoito

イメージ画・張 祐寿

最近、足助病院内で「映画同好会」なるものが発足したとの話を聞き、早速取材させていただきました！今回は、会の創立メンバーである山内さんと遠山さんオススメの映画をご紹介します。

パート1が秋に公開された「レッドクリフ」。有名な書物である三国志演義の、前半の大きな見せ場である「赤壁の戦い」を題材とした、壮大かつロマン溢れる超大作です。「リアルな描写や、男気のある役者の演技に引き込まれる」と話す山内さんは、孫権が奮起する場面がお気に入り。遠山さんは、「三国志はあまり知らなかったけれど、随所で説明がでるので分かりやすかった」と言います。

同じ映画に興味を持ち、一緒に観に行ったことから始まったという足助病院「映画同好会」。定期的に映画鑑賞をすることで日々の疲れを吹き飛ばし、仕事への熱い士気を高めているのかもしれません。

（文・張 祐寿）

院内散歩

B棟一階 レクリエーション

火曜の午後、B棟一階のナースステーション前から、患者さんと職員さんたちの楽しそうな話し声や笑い声が聞こえます。少し覗きに行ってみましょう。

この時間は、その時々に合わせた会を開いたり、みんなで一つの作品を作ったりする「レクリエーション」の時間。患者さん同士や、患者さんと職員さんが交流し、関係を築く場にもなっています。

▲季節に合った飾り付けや行事に、会話が弾む。

今回はお茶会が開かれ、テーブルを囲んで職員さんお手製のプリンに舌つづみ。

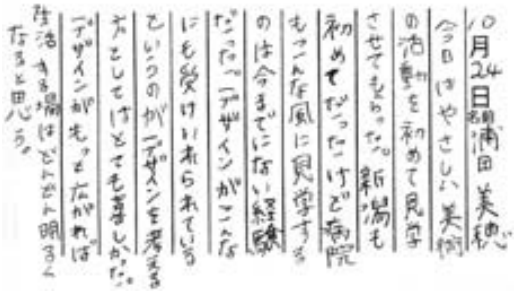
「患者さんが楽しみながらできることを行い、入院生活の中にも生きがいやメリハリを持ってもらいたい」と職員さん。その明るく話される様子が患者さんと重なり、「楽しい」という気持ちが職員さんから患者さん、そしてまた職員さんへ伝わっているのを感じました。B棟一階が、どことなく和やかな雰囲気を持っている理由の一つかもしれません。

（文・張 祐寿）

院長の一句

医師不足の折
病院経営・業務とも苦しい状況であればあるほど、
仕事の必要性、人間の本音が露呈される。

苦しいときこそ真実に迫れる


妻有研修紀行

10月24日 浦田 美穂

今日はやさしい美術の活動を初めて見学させてもらった。新潟も初めてだったけど病院もこんな風に見学するのは今までにない経験だった。デザインがこんなにも受け入れられているというのがデザインを考える人としてはとても嬉しかった。デザインがもっと広がれば生活する場はどんどん明るくなると思う。

編集室から・・・

こんにちは。外はすっかり冬景色、防寒具が手放せなくなりましたね。プロジェクトの活動は今月も盛りだくさん！まだ記事として取り上げていませんが、大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ二〇〇九に向けての活動も着々と形が見え始めました。私も他のメンバーに負けじと、夏の妻有の田園風景や雪の重みを思い出しながら、十日町病院へ出す作品案を考えている今日この頃です。（文・竹中 仁美）

お知らせ

絵はがき募集！

やさしい美術プロジェクトでは、足助病院の患者さんが使用する絵はがきフレーム付きマルチボックス「私の美術館」に届ける絵はがきを募集しています！

【募集要項】

はがきサイズ
縦100ミリ × 横148ミリ

※横書きのみの募集となります。
※作品は返却されません。
※患者さんへの配慮により、選定する場合もあります。
※作品を刊行物・資料に掲載する場合もあります。

■連絡先
名古屋造形大学　やさしい美術プロジェクト「ヤサビのイト」係
〒485 - 8563　愛知県小牧市大字大草字年上坂 6004
TEL　0568 - 79 - 1111（代）　HP　http : //gp.nzu.ac.jp
FAX　0568 - 79 - 1070　MAIL　gpnews@nzu.ac.jp
［協力］足助病院 / 三州足助屋敷 / 足助町の皆さん / 発達センターちよだ / 十日町病院

■発行
名古屋造形大学
平成19年度 文部科学省 現代GP採択事業
やさしい美術プロジェクト

［ヤサビのイト編集部］
赤塚 ベッキヤ　竹中 仁美　（情報D・2年）
張 祐寿（メディア造形・2年）　浅野 瑠璃子（視覚伝達D・2年）

第8号（奇数月第3日曜日発行）